お元気ですか ⑰

鼻からの胃カメラ

由岐病院内科　本　田　壮　一

【著者略歴】
本田壮一（ほんだ そういち）
由岐病院院長・阿部診療所所長（兼任）
昭和 33 年 7 月、美波町田井の生まれ。富岡西高、徳島大学医学部卒業。徳島大学病院内科、関連病院勤務後、平成 17 年 4 月より、現職。

胃の中を直接観察することは、胃がんなどの診断に大いに役立ちます。1950年、宇治達郎医師と町工場の技術者が、最初に「胃カメラ」を開発しました。当時は、先端に小さなカメラがついていました。その後、曲がっても光を、端から端へそのまま伝えるガラス繊維（グラス・ファイバー）を用い、カメラ自体を胃の中に入れる必要はなくなりました。さらに、画像を数十万個もの画素でとらえ電気信号にかえてテレビモニター画面に送りこむ胃カメラが開発されました。大腸や胆道をみることもできるようになり、また手術などの治療に使われるようになりました。

胃カメラは「うどん」ぐらいの太さと、私は説明していましたが、直径が10ミリほどあり、のどを麻酔して、口から挿入していました。最近の技術進歩で、細く・しなやかな内視鏡（直径5.9ミリ、ほぼ鉛筆の太さ）（図）を、鼻から入れて観察する方法が普及してきたので紹介します。この1月より由岐病院に導入され、好評です。

図：スコープの先端部（実物大）

のどの診察で、舌の奥をヘラ（舌圧子といいます）で押されて「オエッ」となりそうな経験をした方は多いと思います。これを咽頭反射といいますが、口から胃カメラを入れると、この反射が起こります。ところが、鼻から入れる場合は舌の根元に、胃カメラが触れないので、ほとんど吐き気をもよおすことなく、検査することができます。

また、口から内視鏡を入れる場合、口がふさがってしまうために検査中は話ができません。しかし、鼻からの場合は、検査をしている医師と「痛くないですか？」「はい、大丈夫です。」という会話ができます。安心して検査を受けられます。

鼻からの内視鏡検査の場合、鼻腔への局所麻酔を行いますが、麻酔から覚めるのも早く、すぐに日常生活へ復帰できます。通常の口からの場合、1、2時間は食事ができませんが、鼻からの検査の場合は検査終了後30分から1時間で、水を飲んだり、食事をすることができます。原則的に注射を行わないので、麻酔が覚めて体の状態がもどれば、車の運転もすぐにできます。

最後に、理想の内視鏡は「カプセル内視鏡」です。「ミクロの決死圏（1966年）」という映画のように、極小の内視鏡をカプセルに埋め込み、カプセル自体の推進力で胃腸内を任意に移動させ、各部の画像を無線で送ってテレビモニターに映し出す、そんな内視鏡も開発中とのことです。

注：胃腸視鏡（胃ファイバースコープ）をわかりやすく「胃カメラ」と表現しました。

参考

1）吉村昭「光る壁画」（新潮社、1984年）

2）プロジェクトX挑戦者たち
「がんを探し出せ～完全国産・胃カメラ開発～」
（NHK- DVD、平成12年4月18日放送分）

ご意見・ご感想を歓迎します。

〈由岐病院　FAX：0884(78)0533〉